

遠くなどは決してない奎太郎

戸塚 惠 三

1・

八十代に入ってやっともとめることのできた木下奎太郎の植物写生図譜『百花譜』。

古書にして、もとの所有者の記名もそのままの堅牢なる大冊、上・下二分冊がひとつ布装函に収まっている。手許にある当時の内容見本には、初版の発売日が昭和五十四年三月十九日と記されている。かえりみれば、半世紀ほども前の刊行物である。

これまでにも、四冊本『木下奎太郎画集』（用美社）——特にその第三卷〈昆虫篇〉には、「花鳥草木」の一章をもうけて新旧の二十図を収めている。——や、一枚ごと取り外して掲額もできる一〇〇枚抜粋版『百花譜百選』（岩波書店）もありはしたが、こうして全容に接してみると、おのずからにして別様の感慨が湧く。

木下奎太郎（きのした・もくたろう）、明治十八年（1885）八月一日生まれ、昭和二十年（1945）十月十五日永眠。伊豆伊東出身の医学研究者。ハンセン病解明の世界的権威、また、耽美派の詩人。代表作と

して、小ぶりで瀟洒な版型の詩集『食後の唄』（大正八年）と、目次のあとに自作挿画八葉を貼り込んだ『木下李太郎詩集』（第一書房・昭和五年一月刊）を持つ。

2・

収載第一図「まんさく」にはじまりその総図譜数八七二。

終りに近い第八七図「ききょうそう」までようやくたどりついて、ふと手を止めた。

図版の中の余白部分に書き込まれている鉛筆書きの数行の記事が気になったのである。

この種の文言のことを識語（しきご、又は、しご）と呼ぶようであるが、もの古りた原図の薄い印刷からは、その文字群が判然としない。幸いなことに、これらの識語の全内容は、『木下李太郎日記』第五巻の469ページ以降に収録されている。次のようにある。

七月二日 月曜日 曇

「ききょうそう」

明日入院するをもて久しぶりにて植物園に往く。花を採つて松崎氏に誰何せらる。火を被りし樹木の焦れし幹に *Monilia stip hila* 盛に繁殖す。東京大震災のあとにもかくの如きこと有りしと云ふ。

冒頭の日付「七月二日」は、昭和二十年（1945）を指す。

この年の八月十五日が太平洋戦争終結の日である。同月の一日に還暦を迎えたばかりの李太郎は、わずかの二か月後の十月十五日に亡くなられた。六十歳のその死は惜しみて余りある。いかにせん早過ぎる。

文中にある一語「誰何」（すいか）も、シリアスなものと意味を離れて、ここでは相手の意気軒昂に対する軽いエールのおもむきがある。植え込みの一枝をちょっと失敬したことへの窘め（たじま）に對し、当の松崎氏の日々の

精励恪勤をむしろ微笑ましく思っているのにちがいない。

総じて、李太郎が写しとる草花は、彼がその自然美を素朴に愛でること以上に、この戦時下において、刻一刻と悪化の一途をたどる食糧事情に対する遠き慮りを、暗に秘めていたのではなかったかと思われる。同じ『李太郎日記』の中にだが、同年六月十三日の頃には、「救荒本草百首」（執筆者注。全十九句で終わっている。）として、「壕の土返り新芽のはこべかな」「焼あとの庭やぎぼしの擴まりぬ」「すかんぼのサラダの贅や疎開人」などが記されている。

3・

李太郎の珠玉の掌篇の一つ、末尾に括弧付きの日付——（乙酉六月上浣）——を書き添えた作品がある。

「すかんぼ」である。

わたくしがこの作品にはじめて接したのは、李太郎会が昭和六十年十二月三十日に発行した「絶筆原稿複刻版（普及版）」によってであった。

梓外にM・O・T・A——ちなみに、木下李太郎の本名は太田正雄である。——のローマ字表記のある四百字詰原稿用紙十六枚を複写（縮尺）して袋綴じしただけの簡素な装本であった。

薄表紙の紺青が、いかにも伊東の海を思わせる。

干支をあらわす〈乙酉〉は、イツユウ、または、きのとり。昭和二十年（1945）にあたる。「上浣」は、上旬の意。よって、執筆年次は、昭和二十年六月上旬、作者最晩年の作品と知れる。

中の一文に「昨年以來はこの乏しい知識に、時節柄、實用性を与へようと思ひ、食べられる野草の實驗に指を染めて見た。もう救荒本草類の図書を蒐める便宜もなくなり、専ら親試に便るのみである。そして既に五十幾種かの自然生の葉茎を食べ試みた。」（絶筆原稿十二頁ウウ）とある。

作者の思いは、可食野草を取りあげつつも、その実きびしく現実味を帯びてきた当時の末期的情勢に対する

危惧表明にこそあった。

文字通りの遺稿となった「藜園雜記」——昭和廿年六月廿九日金、の日付がある。——の中にも、「昨年以來一般の人々も亦食糧に心を費すやうになり、予も亦私かに食用雜草を試験した。(略)今年孟夏に至り藜の嫩葉を試食した。」とある。

戦時下の、迫り来る食糧危機をいかに憂慮していたかがわかる。

読むほどに、現今のわたくしたちを取り巻く食糧事情のその先に、環境破壊や人権侵害が数限りなく起っていることへの警鐘と受けとめる想像力を持たなければならない。無関心であってはならぬと強く思い知らされる。

4・

この、掌篇「すかんぼ」のうちに、初めて読んだ時から気にかかっていたことがあった。

本文「幾十年ぶりにそれ(執筆者注。すかんぼ、を指す。)を食べてみて、『白頭江を涉って故路を尋』ぬる人の如き一種の感興を得たと云ふに止まるのである。」(十五頁ウラ)の中に引用された漢詩書き下し部分についてであった。詩題と作者とを知りたいと思った。この漢詩の全体像が確認できれば、李太郎理解をより深める一つの手がかりとなるにちがいない。が、わたくしの管見をもってしては、いかんともなし得がたかったのである。

究明のきっかけは、新聞社勤務の知人がもたらしてくれた。

本年五月、彼による広汎なインターネット検索は遥か中国のサイトにまで及び、わたくしは以下に記す連絡を受けた。(部分)

劉詵^{リウシン}という元時代の詩人の七言古詩の中に「白髮涉江尋故路」の一句がありました。

木下杢太郎の引用詩とでは、「白頭」と「白髮」の違いがあるものの、意味はほぼ同じですので、おそらくこの作品で間違いはないかと思います。（略）元代の詩を引用する教養の深さに改めて驚きました。

詩題は「飲谷平李氏」（谷平ノ李氏ト飲ス）であった。

晩秋の候、作者は義兄李氏をたずね久闊を叙す。病気がちの義兄は、それでも精いっぱい飲待してくれた。詩篇末尾の三句、

夜深山月窺前庭

童稚熟睡二老醒

談旧未了荒雞鳴

試みに、（夜深クシテ山月ハ前庭ヲ窺フ。童稚ハ熟睡スルモ二老ハ醒メ、旧ヲ談ジテ未ダ了ラザルニ荒雞ハ鳴ク。）と書き下してみる。

すると、唐詩人李白の、広く知られた五言絶句「静夜思」の起・承句「牀前看月光、疑是地上霜」までも思ひ合わされて、いつ果てるともない懷旧談のうちに、気づけば鶏鳴、すでに東の空が白んでいる。

読者の心にもまた、思郷の念がよみがえる。

年来氣がかりであった一件はこうして落着して、わたくしの杢太郎探究には一段と加速がつく。その一方で、往時この帰郷詩を想起する杢太郎の心のうちを思いやると、みずからの健康への極度の不安が重くのしかかっていることがわかって切ない。

『百花譜』最終図譜八七二（やまゆり）の識語には、「昭和廿年七月廿七日 金」として、次のように記さ

れていた。「胃腸の痙攣疼痛なほ去らず。家居臥療。安田、比留間此花を持ちて來り、後之を寫す。運勢たどたどし。」

5・

かつてわたくしも属した職域の、その機関紙である「互助新聞」の中に、M氏の講演予告「歌になった李太郎の詩」を見出したのは、昭和五年十一月号（第646号）であった。

M氏は、『不可思議国の探求者・木下李太郎』（短歌研究社・二〇一七年）の著作を持つ歌人である。

会場の伊東市、開講午前九時に合わせるすべのなかったわたくしは、後日問い合わせて講演当日資料のご恵送にあずかった。（私家版冊子ならびにCD一枚）

そのCDには、「海の入日」「石竹花」「伊東小学校校歌」の三曲が入っていた。

最初の「海の入日」を聴き、寄せられた資料を繰って、李太郎がこの詩篇のあとに改めて添えたという「海の入日・序」を読んだ。

伊豆伊東の夕陽の海景を叙して、刻刻、光の織りなす色調の微妙な変化を、科学者にふさわしく、手垢にまみれぬ清新な用語のうちに写しとる。「燈光に照らされた自然銅鑛の赤」、「濁った螢石の紫」、「あかあかと熱せられたる電気煖爐の銅板の面」など、と。

大胆なこの漢語駆使の形容に、わたくしは少しも奇異の念をいだかなかった。思い出す一文がある。

自分は視官上の印象を受けることが強い素質であったから夙くから繪畫を愛して職業をも此道に求めようとした。

小山内薫、久保田万太郎とあわせて、自作四作品を収めた『現代戯曲全集』第十一卷（國民圖書株式会社・昭和二年）の「跋」として記したものである。

なお、この直後の一文「然し心中に危惧があつて逡巡し意を翻して醫學に就いた。」も忘れがたく重い。

今回、つたない追究ながら、木下杢太郎作品を読み次いで深く感じ入ったのは、その断念と諦念のはざまに模索を重ね貫く精神の姿勢であった。わたくしにとり、より身近な存在となることを強く印象づけられた。思い起せば、文化の原義は農耕であった。

『詩経』（小雅）にあるように、「或ひは耘^{へん}り、或ひは耔^しふ。」がその原点である。

対象の真実に近づくその手だても、この一句に尽きている。（了）